

十島村の居住空間の現在

——口之島を中心に——

Living Spaces Today in Toshima-mura

Focusing on Kuchinoshima

清水 郁郎

SHIMIZU Ikuro

要 旨

1930年代に、渋沢敬三が中心となって組織されたアチックミュージアム同人は、鹿児島県十島村での調査において、いわゆる「アチックフィルム・写真」と呼ばれる多くの資料を残した。本稿は、それらの資料中のとくに写真を主な手がかりとして、十島村における居住空間の様態の変化を考察するものである。「アチックフィルム・写真」では、家屋やそれを取り巻く居住環境自体はおもな撮影対象ではなかったこともあり、それらの民俗資料はそれほど多くない。そこで、当該地域の家屋を中心とするいくつかの既往研究を参照しながら、十島村とくに口之島の居住空間と家屋の過去と現在を取り上げる。

最初に、十島村と口之島の地政学的概況を述べ、つぎに、文献資料をもとにして当該地域のかつての民家の形態を再考する。その後、国際常民文化研究機構によっておこなわれた現地調査において、現在の口之島住民に聞き取りをした結果を用いて、当時の家屋や村落がどのようなものだったのかを把握する。続いて、現在の口之島の家屋に関する実測調査やヒアリングに基づいて、口之島の過去から現在までの変化を跡づけ、さらにアチックミュージアム同人の活動意義を、現在の文脈のなかに位置づけたい。

【キーワード】 アチックミュージアム同人、十島村、口之島、居住空間、渋沢敬三

1. はじめに

1) 本稿の目的

本稿は、おもに1930年代に渋沢敬三とアチックミュージアム同人ら（以下、アチック同人）によって撮影されたいわゆる「アチックフィルム・写真」（以下、「フィルム・写真」）のとくに写真について、家屋をはじめとする建造物や村落などの居住空間がどのように記録されていたのかを視野に入れながら、鹿児島県十島村の口之島における居住空間の現在の様態について報告する。

はじめに、「フィルム・写真」を精査し、そこから居住空間にかかわる要素を抽出する。それを、アチック同人の訪問地における映像・画像上映会⁽¹⁾のさいに現地の住民に確認し、そこに何が写されていたのかを確認する。

図1 十島村の位置



図2 口之島全図

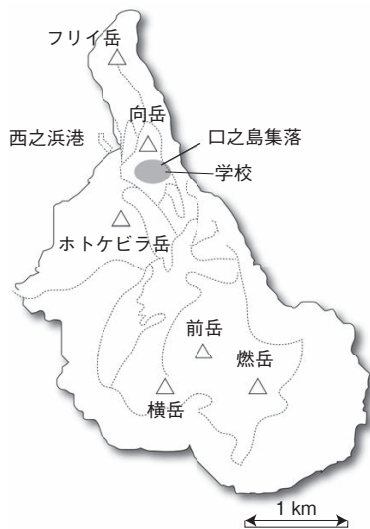


写真1 カワ

つぎに、現在の居住空間を実際のスケッチと実測によってあきらかにし、アチック同人が撮影した当時からの変化の様子を確認する。

具体的に分析の対象とするのは、鹿児島県十島村口之島である。1934（昭和9）年、アチック同人は、前年に就航したとしま丸に乗って薩南十島を訪れた。目的は、当時の先端をゆく学際的な総合調査である。その中には口之島も含まれ、アチック同人は、当時の調査内容を貴重な動画や写真として記録にとどめている。

本稿は、彼らがみた当時の口之島の居住空間はどのようなものであり、それはまた、現在、どのようになっているのかを報告する。

2) 口之島におけるアチック同人の調査について

(1) 十島村のなかの口之島—現在の地勢

十島村は、北緯 $29^{\circ}08' \sim 29^{\circ}59'30''$ 、東経 $129^{\circ}13' \sim 129^{\circ}55'01''$ のあいだ—屋久島と奄美大島のあいだ—に点在し、トカラ列島と呼ばれ、北から口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島、宝島の有人7島と、臥蛇島、小臥蛇島、小島、上ノ根島、横当島の無人5島の合わせて12の島々からなる。個々の島々は、広大な海によって隔絶されており、民俗的には琉球文化と大和文化の接点とされている。口之島から悪石島までの各島は、火山特有の地形であり、周囲は断崖絶壁に覆われ起伏が激しく平坦地が少ないという特徴を持つ。いっぽう、小宝島・宝島は珊瑚礁が隆起した島であり、山も低く平坦地も比較的多い。気候は温暖だが雨も多く、夏季は台風の常襲地帯であり、冬季は北西からの季節風が強く吹く。

口之島は、十島村の最北に位置し、面積 13.33 km^2 、周囲 20.38 km の小島である。平成16年度の国勢調査によれば、同島の人口は140人（男性67、女性73）、世帯数88である。特徴としては、タモトユリ、アダン（北限）、トカラヤギ、野生牛などの動植物が生育していることで知られる。アクセスは船に限ら

れ、鹿児島港を出航した村営船が最初に到着する十島村の玄関口となる。島は、燃岳に代表される火山島で、島のほぼ中央にそびえる前岳（628 m）山麓に広がる原生林から海岸方面にかけて、なだらかな起伏となる。同所では野生牛が生息する。土地の利用状況は、牧場、水田、畑などだが、前述したように平坦な場所は少ない。集落は、島の中央部に口之島、また、船が接岸する西之浜がある。口之島集落の中心には、ガジュマルの巨木があり、その下にはカワまたはユウと呼ばれる泉が湧き出ている。

(2) アチック同人の十島村調査

1933（昭和 8）年 4 月、鹿児島とトカラ列島の島々を結ぶ唯一の公共交通機関かつ初の定期村営船となる「としま丸」が就航したことを受けて、翌年の 1934（昭和 9）年 5 月にアチック同人の同村への訪問が可能となった。そのさいの訪問メンバーは、渋沢に加えて、民俗学の桜田勝徳、早川孝太郎、高橋文太郎、宮本馨太郎、地理学の小川徹、宗教学の宇野円空らがいた。この調査旅行は、アチックミュージアムが試みた最大規模の合同調査とされている。

一行の行跡の概略はつぎのとおりである。5 月 14 日に鹿児島を出航し、同日中に竹島、硫黄島、口永良部島を訪問し、翌 15 日に本稿でも対象とする口之島、中之島、諏訪之瀬島に上陸する。続いて、16 日に平島、小宝島、宝島を歴訪し、翌 17 日早朝には奄美大島に至った。このように、慌ただしく 1 日に数島を訪問したが、島によっては滞在時間が 2 時間程度であったとされる。

2. 口之島の居住空間

1) 十島村の村落と民家

桜田勝徳の記録によれば、アチック同人が口之島に到着したのは午前 5 時であった。同日中に、中之島、諏訪之瀬島へも訪問していることから考えて、同人の同島での滞在はそれほど長くないことは確実である⁽²⁾。また、アチック同人の視線は、多くの場合、民具に向けており、本稿が対象とする居住空間の様態に関しては、それほど明確な記録が残っていない。

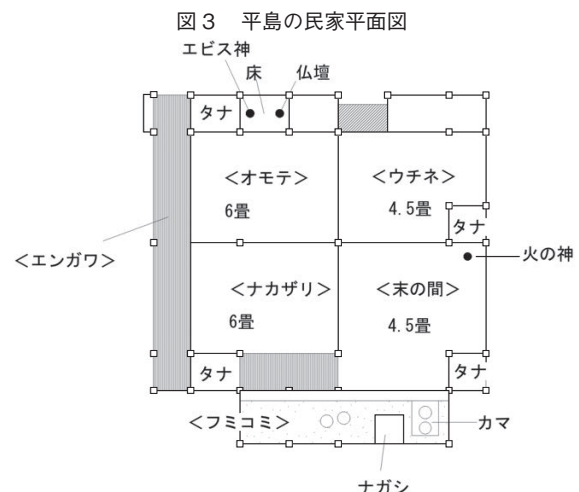
こうしたことを受けて、ここでははじめに、口之島以外の諸島を含めた十島村の居住空間、とくに村落と家屋に着目して、記録されたものを概観しておきたい。

『十島村誌』によれば、同村の居住地立地には古今東西を問わず、水や地形との関わりが深い。その理由は、表流河川に乏しく、また、海岸低地に恵まれないからである。よって、人の居住地は内陸部の湧水近傍になるとされる [十島村誌編集委員会編 1996: 331]。そして、内陸の集落がいわゆる「親村」になり、海岸部の集落は「子村」になる。後述するが、この点は、今回の口之島での調査でも確認できた。アチック同人訪問時には、海岸近辺に集落はなかったという。他に口之島に関連する記述を拾うと、同島の親村の集落内が 9 つの「ぶら」と呼ばれる領域に区分されていることなどが述べられている。

いっぽう、『十島村誌』には、口之島の民家に関する記述はみられない。そこで、同誌に記載のある平島の民家の間取りから、口之島を含めたかつての十島村の民家について概観する [十島村誌編集委員会編 1996: 864-871]。

この家屋は、平島にあって 1959（昭和 34）年に口之島の大工によって建てられた。木材の樹種は杉で、本土から持ち込んだとされる。また、その他の樹種を、口之島その他の十島村内の他島から集めたという。

家屋の内部は、田の字型に縁を加えて組織されている（図 3）。また、図では下側にあたる部分に炊事場が付設されている。また、図の左側、オモテとナカザリという居室を跨いで、縁側にそって庇がかけられていたという。その奥の棚には七島正月の「親霊」を祀る。この事例



では、炊事屋は母屋に付設されているが、当時は、母屋から離して造るのが一般的であった。理由は、カマドからの暑気を嫌うためである。また、便所も別棟であった。

家屋の建設に関しては、結いでおこなわれた。それは、技術を伝える機会ともなった。また、宝島では、1965（昭和40）年に、コンクリート造の20坪の家屋で建築費20～30万円という記述がある。これは、結いで建設がおこなわれるために基本的に労賃がかからないこと、現代の施工技術からはおおきな問題だが、当時はセメントに混ぜる砂を海砂としていたことや木材を島内に自生している樹木から加工できたことなどが理由とされる。

いっぽう、野村孝文によれば、トカラ列島の民家についてつぎのような記述がある。民家は一般に主屋（オホエ、大家）とトーグラ（カマヤ）の2棟からなり、奄美と同形式である〔野村1961：93-94〕。上記の平島の事例で提示した家屋も呼称がオーエとなっており、主屋のことである。主屋であるオーエは、暴風雨の被害を少なくするために主屋をふたつに分け、それぞれをウエノエ、シタノエと呼んで区別していた〔*ibid.*〕⁽³⁾。

2) 記録のなかの居住空間：住民からの聞き取り

つぎに、上記までの点を踏まえながら、アチック同人によって撮影された写真をおもにみていく〔神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学 国際常民文化研究機構編 2011〕。以下の表1は、通し番号、目録内の整理番号、写真撮影者、撮影時期、写真、目録記載事項および現地での上映会のさいに得た知見を記載した解説からなる。





(1) 口之島住民による解説：集落に関して

- ・松の木：撮影時、島の松の木が松食い虫により全滅していた。そのため、後年、杉を植樹するようになった。
- ・ガジュマル：当時、防風林として、ガジュマルの木が村の周囲にあった。親に叱られた子どもが、ガジュマルの樹上で夜まで過ごし、親が寝るのを待って自宅に戻るようなこともあったという。
- ・高倉について（表1⑥）：当時（～昭和40年代まで）は、各世帯にひとつの高倉があった。倉の内部には、米、芋、塩干した魚のような食料品の他に、家財道具なども収納していた。高倉の柱は杉かシイの木であることが多く、また、屋根には家屋とは異なり、600 mm程度の厚さにカヤを葺いた。
- ・高倉（クラ、ウシゴヤ）：動物とくに牛の飼養は高倉の床下でおこなわれていた。
- ・漁師小屋：当時の西之浜には漁師小屋が建ち並んでいた。

(2) 口之島住民による解説：家屋に関して

- ・竹壁（表1⑫）：目録番号ア-10-35の写真に関して、民家外壁は竹を網代に編んだ竹壁だった。
- ・屋根材：当時の島にカヤは自生していたが、多量に採集できなかった。そのため、壁に加えて屋根材にも竹を使用した。竹の伐採は1年中ではなく、9～10月に集中した。
- ・屋根材としての笹竹について：かつて、屋根葺きを専門とする「屋根葺きどん」という職能者がいた。そうした専門の職人に、屋根葺きを依頼するのが慣例だった。労働の対価としては、反物などがあつた。伐採した竹は枝を切り払って、畳1畳程度の長さ（1,800 mm程度）に揃えておく。つぎに、適度に並べた竹の下に横木を渡し、縄で結束する。このようにして、笹竹のパネルをつくっておく。そうしたパネルを順次屋根に葺いていく。屋根の両側の勾配面を葺き終えたら、棟の部分にカヤを葺く。こうした笹竹の屋根のメリットは、風雨などで傷んだ部分だけを、簡便に補修したり、取り替えたりできることだという。

表 1 居住空間と関わりの深い写真資料

番号	目録番号	写真撮影者	撮影時期	内容	解説
①	ア-10-37	竹内亮	昭和9年		西の浜の風景。 海亀の産卵がみられた。 集落はみられない。
②	ア-10-29	三宅宗悦	昭和9年		口之島の小学校で男性による狂言。 小学校校舎と思われる建物には瓦が使われているように見える。公共建築物では、このように瓦葺きがされていたのかもしれない。
③	ア-10-8	三宅宗悦	昭和9年		前岳の遠景。 中央の伐採地は屋根の葺き替えのための竹を刈ったため。
④	ア-10-16	竹内亮	昭和9年		ガジュマルと池。 現在のコミュニティセンター付近である。 奥に見える小屋は、豆腐小屋、焼酎小屋、水神の祠など、諸説ある。

番号	目録番号	写真撮影者	撮影時期	内容	解説
⑤	ア-10-15	竹内亮	昭和9年		ガジュマル 放し飼いのニワトリがよくとまっていた。
⑥	ア-10-25	高橋文太郎	昭和9年		高倉 カワのそばにあり、米を入れていた。 下では牛を飼っていた。 昭和50年代まではあった。 一本梯子を使って上がる。
⑦	ア-10-22	谷口熊之助	昭和9年		高倉 穀類や芋を貯蔵する。 ネズミに食べられないようにする。 奥に見えるのは隠居小屋、母屋など諸説ある。
⑧	ア-10-18	桜田勝徳	昭和9年		墓地に立つタマヤ 死者の遺骸の上に乗せる小さな建物をタマヤというが、これがタマヤかどうか定かではない。寺の小屋の可能性もある。
⑨	ア-10-21	谷口熊之助	昭和9年		大麦の畑にある作小屋 いわゆる出作り小屋で、畑に作られた。 現在はない。屋根は竹、壁は竹、杉、杉皮など。壁は編んでいない。

番号	目録番号	写真撮影者	撮影時期	内容	解説
⑩	ア-10-26	高橋文太郎	昭和9年		民家と道 中央に見えるのは、別棟の便所である。家屋の建設には、村人が総出で手伝った。
⑪	ア-10-20	桜田勝徳	昭和9年		民家 松が特徴的だが、場所は確定されていない。棟を押さえる竹は、棟が暴れるのを防ぐためである。
⑫	ア-10-35	高橋文太郎	昭和9年		民家の前の子ども 後ろの民家の壁は、竹を網代に編んだものである。餅を入れて保存するツトと呼ばれる民具が壁に吊るしてある。

・ 笹竹の利用について：家屋の建設を予定する2、3年前に自生地を選び、全村に家屋建設の旨を伝える。また、利用する笹竹を加工して目印をつける。

(3) 口之島住民の解説：家屋にかかわる習俗

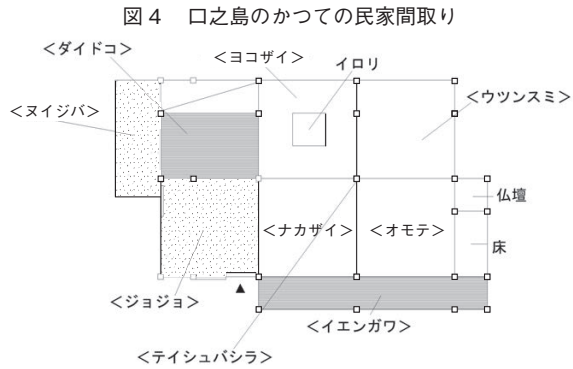
- ・ 魔除けの習俗：家屋の軒下に松の枝を刺していた。松がない場合は、タラの芽のようなトゲのある樹種の枝でもよかった。
- ・ 子供の節句に関する習俗：3月の女子の節句のさいに、家屋の軒先に吊るすツトと呼ばれるものがあつた。子供と同じ数の竹のへぎを縄で縛り、一番下部に藁で包んだ餅を吊るすものである。

3. 口之島の居住空間の現在

1) 住民の記憶のなかの家屋

ここでは、口之島のかつての家屋について、2010（平成22）年の調査で聞き取りをすることができた住民N氏、I氏から、自身が暮らしていたかつての家屋を事例としてその特徴を述べる⁽⁴⁾。

はじめに、家屋の規模としては3間半×3間や3間×4間などの大きさがあつた。施工者は住



民自身（I氏の父親など）だが、後年改修（改造）したさいには、中之島から大工を呼んだという。

間取りの特徴は、田の字型平面が基本である。図4はN氏の記憶のなかのかつての民家だが、3尺の幅の縁側（イエングワ）の奥に4.5畳の居室が2列に並ぶ。手前の左側はナカザイと呼ばれる居室で、その奥がヨコザイまたはイロリバタと呼ばれるイロリを持つ居室となる。これから考えて、ヨコザイが居間的な機能

を持っていたと推測できる。ナカザイの横は、オモテと呼ばれる居室であり、仏壇が設置され、また床があった。このオモテには、葬儀のさいに、遺骸を北枕で24時間安置していたという。その奥のウツスミ（ウチノスミまたはウチノマ）は夫婦の寝室であり、東に頭を向けて寝ていたという。

ヨコザイの左横には、一間幅の土間のスイジバ（カマド）があり、そこには水桶やカマドが置かれていた。図4の場合、スイジバと主屋のあいだにダイドコやジョジョと呼ばれる土間が敷設されていた。

家屋にかかわるその他の情報としては、玄関、風呂、カマド、床の間は北向きにするのはよくないとされていた⁽⁵⁾。他に、天井は1尺程度の杉材を張り、6月ごろに天井を外して掃除（煤払い）をするのがならわしだった。そのさいには、家財、畳なども全部天日干しをしていた。

建築部材として使われるのは杉材が多かったが、屋久杉の他に島内に自生している地杉（ジスギ）が使われることも多かった。

2) 現在の家屋の特徴

今回の口之島での調査では、前述N氏の家屋について実測をすることができた。実測した図面は、平面と各部詳細図である。平面図には、おもな生活財、物品も合わせて記入した。さらに、図面の補足のために、家屋内外の各部の写真撮影をおこなった。ここでは、そうした図面資料から、現在の口之島の家屋の実際について述べる。

この家屋は、築90年で、N氏の祖父が建設したものだという。現在は、N氏がひとりで居住している。島に在住する娘夫婦がなにくれとなく世話を焼きにくるという。



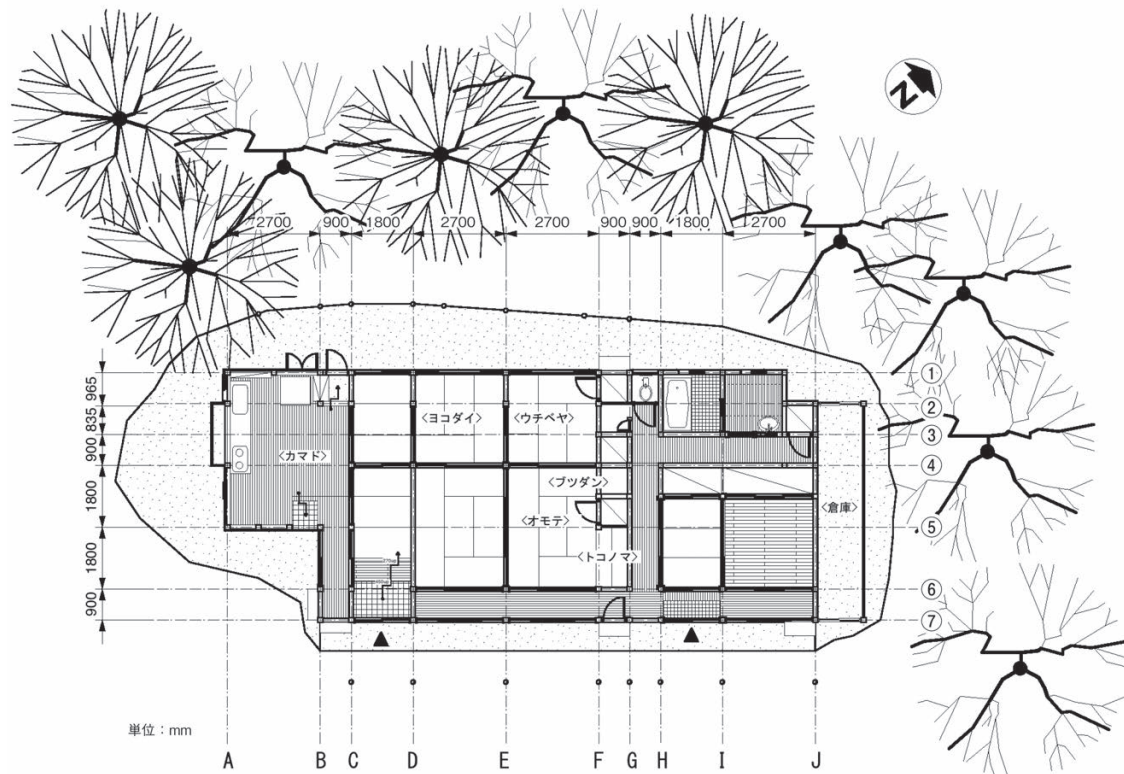
写真2 N氏の家屋

建設に使った樹種は、おもにジスギである。これは、先祖が植えておいたものを伐採、加工したもので、それらの作業はすべて自分たち（祖父ら）がおこなった。施工にあたっては釘を使わなかった。たとえば、天井は釘を使わずただ棧に乗せてあるだけである。

現在の屋敷の内外に生えている松の木は、父親が防風林として植樹したものである。しかし、その後、松食い虫の虫害があり、一本を残して枯れてしまった。

間取りの特徴としては、旧来の田の字型間取りからの変化がみられる。ひとつは、ナカダイ（ナカザイ）とヨコダイ（ヨコザイ）の横に小さな居室と玄関が敷設されていることである。

図5 口之島における現在の民家平面図



また、さらにその横に、板敷きの炊事場を設けたことである。

天井には杉板が使われているが、その板は1970（昭和45）年に張り直したものである。そのさいには、ジスギを鹿児島に持ち込んで製材した。そのとき、同時に屋根を茅から現在の瓦に葺き代えた。このさいには、玄関も付設した。それまでは、板の格子戸だった。

もうひとつのおおきな変化は、元々の主屋の奥側、G通りの中廊下から続く居室部分である。トイレと風呂を含む増築（改造）は、1970（昭和45）年におこなわれた。N氏の孫3人の居室として使うためであったが、当の孫たちは、現在では鹿児島に在住しており、使用者がいない。調度品や生活財はそのまま残っているが、半ば物置と化している。

台所は、1989、1990（平成1、2）年頃に改造している。元々は、先述したように土間であったが、その後、コンクリートを打って炊事と食事の空間を設けた。さらにその後、現在の板敷きの台所を増築し、炊事と食事を床上とした。

3) 構法上の特徴

口之島の調査では、さらに、家屋の柱と梁の接合におおきな特徴がある（図6）。これは、梁と取り合う部分の柱の柱頭を二股に欠き、逆に、柱と取り合う部分の梁を欠いて、両者を接合させるものである。形態としてはいわゆる合欠きになり、その両者を貫通させるように、栓をいくつも込めるといふものである。この構法により、口之島の家屋は、梁を長く外側にのばすことが可能になっている。これは、縁や廊下に相当する空間を生み出すために、きわめて合理的な方法といふことができるだろう。現地での聞き取りによれば、この構法は口之島独特のものであったという。

ルーフィング（写真3）と呼ばれる屋根材は、従来の瓦が雨漏りをすることや風害を受けることから、近年、口之島で急速に広まった。この屋根材は、屋根を覆うかたちでゴム状のシートがかぶ

図6 構法の特徴

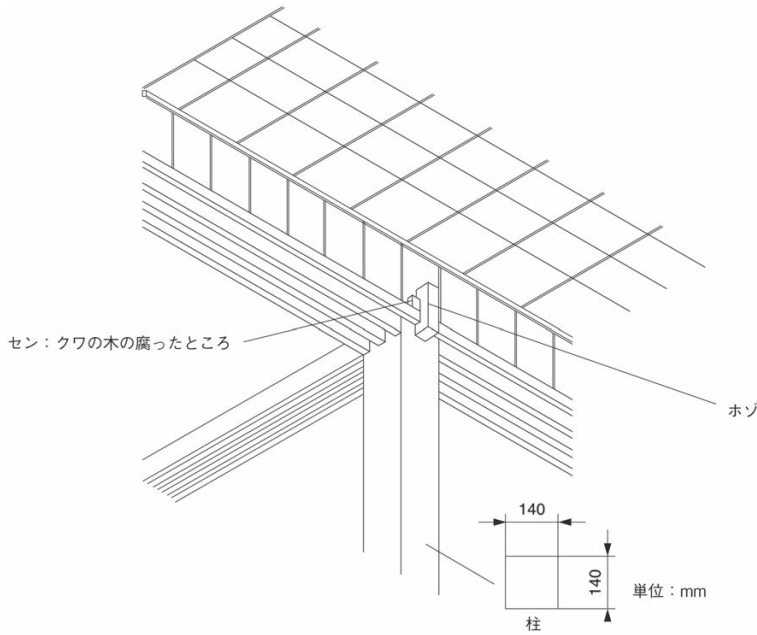


写真3 ルーフイング

されているものである。アチック写真あるいは住民からの聞き取りによれば、この地域の伝統的屋根材としては笹竹葺きが一般的であった。しかし、時代の変遷とともに波形鉄板が使用されるようになった。ところが、近年は、この屋根材を使うことが多い。この屋根材は、実際は各種防水工事の際に使われる下地材である。表面はゴム状の膜で覆われており、水を弾くが、裏面に合成繊維不織布を張り合わせ、強度を高めたものである。

この屋根材は、本来、別の目的でつくられた材料だが、それ

を建築の屋根材として使うのはきわめて特異である。しかし、口之島では、台風や潮風の住宅への影響がおおきく、この材料は、屋根材として利用するに足る十分な理由があるというべきだろう。人びとは、これを屋根の小屋のかたちにかぶせているが、市販のものは赤や黒などの色彩なので、屋根にかぶせた後にペンキでおもに白に着色することが多い。

家屋の構法上の特徴としては、キャクロウと呼ばれる梁を柱通りから3尺出し、縁側空間を生み出している。梁と柱の接合にはアリと呼ばれるホゾを使い、栓を込めている。

家屋はシロアリの被害を受けないように、各柱をイシヅエと呼ばれる海岸から持ってきた礎石ののみ上に乗せるが、その際には、石の曲面に合わせて柱の下っ端を鑿で削っていたという。

4. 比較分析

1) 家屋の平面図比較

図3は平島なので、単純な比較はできないことに留意しながらも、図3から図5は、当該地域の家屋の平面形態の変化をよく表していると考えられる。図3、4は、いわば「田の字型」平面形態を持っている。テिशユバシラなど居室の中央に立つ柱を中心に、居室が田の字を構成するように並ぶ。その外側に、炊事室や土間、縁側が付設されている。こうした田の字型平面を基本とする家屋の内部空間の構成は、南西諸島では普遍的にみられた〔野村 1961〕。

いっぽう、現在の家屋形態のひとつを表した図5もやはり、田の字型の間取りを基底に持つことを示している。オモテヤヨコダイからなる居室群が田の字型を組織し、その周囲に炊事室、縁側

等が付設されている。図5はまた、土間と板の間から構成された炊事室が、完全に床上化し、さらに面積も拡大されていることを示している。さらに、玄関の付設やトイレ、風呂などの水回りを裏手にまとめるなどの工夫も加えて、家屋が現在の都市で一般的にみられる特徴を有していることがわかる。

構法上の特徴としては、内部空間の変化とは歩調を合わせずに、慣習的な材の組み方が踏襲されている。いっぽうで、ルーフィングのように、従来にない新しい材料の特殊な使い方もみられるようになった。生活の必要に応じて、家屋を使いこなすこの地域独特の手法だといえるだろう。

2) 現在と過去の村落空間の比較

図5は、口之島を取り巻く社会的状況が家屋の形式と住まい方にも直接波及していることを示している。この家屋でおこなわれた中廊下とそれに続く孫のための居室の改造（増築）、水回りの整備などは、当時の多世代居住を実現するためであったと思われる。孫たちに個室を与え、その個室は、元々の居室部分とは中廊下を介してつながるようになっていく。プライベートや個室といった概念が、口之島にも波及していたことを示唆する。

しかし、孫たちをはじめとする世帯成員が次々と島を離れるにつれて、居室は使用されなくなっていった。それらの居室には孫たちの物がいまだに置かれたままだが、いっぽうで、収納しきれなくなった家財の置き場所ともなっているようである。さらに、現在の家屋には、高齢の男性がひとりで暮らす。その生活に要する空間は縮小されており、ヨコダイとその手前の4畳半の居室、台所、水回りが、現在の男性がおもに使う居室となっている。

家屋は、多世代同居の大家族の解体から縮小、少子化、高齢化といった、口之島社会を取り巻く状況と如実に関連しながら、その型式を変えながら現在にまで至っているのである。

5. おわりに

渋沢たちが残した「フィルム・写真」は、前述のように、居住空間にかかわる手がかりはそれほど多く含まれていない。そのため、「フィルム・写真」のみから過去の居住空間を再構成することには、困難が伴う。しかし、現地での「フィルム・写真」の上映会、それに続く住居や村落にかかわる個別調査、本稿のもととなった研究成果報告会⁽⁶⁾の過程において、筆者と地元の人びとのあいだでは、「フィルム・写真」を手がかりにした「やり取り」が幾度も起きた。とくに、報告会においては、住民にとってもすでに記憶のなかにしかない家屋と現在の家屋とを比較して提示することにより、家屋の型式変化のみならず社会変化に関する意見を交換することができた。このように、「フィルム・写真」をきっかけとして、地元住民との対話の可能性が開かれたといえるだろう。

注

(1) 本稿の基礎となる口之島における調査は、2010（平成22）年3月23日から24日までと2012（平成24）年3月27日から28日までのあいだ同島に滞在し、おこなった。前者では、「トカラ列島口之島におけるアチックフィルム上映会」と題した上映会を開催した。場所は、同島小学校である。参加者は、本研究代表者の高城玲をはじめ、飯田卓、井上潤、小島摩文、原田健一、羽毛田智幸、因琢哉、岡田翔平、それに筆者である。この上映会の目的は、アチック同人がおこなった学際的な総合調査の内容を見てもらい、動画や写真に関連する情報を地元の人々から聞き取ることを主な目的とした。島民の約半数の50人程が集まった。

(2) 口之島での調査では、アチック同人は午前8時過ぎに島に到着し、午前9時半には島を出発したとの話も当

時を知る住民から聞かれた。

- (3) このように別棟形式が卓越しており、いわゆる分棟の性格が強いことも、トカラの民家系統は奄美民家に連なるものとされる〔野村 1961：34〕。
- (4) 聞き取りは、2010（平成 22）年 3 月 25 日、2012 年 3 月 27 日におこなった。
- (5) 床の間は南、または東に向けるのがよいとされた。
- (6) 神奈川大学 国際常民文化研究機構共同研究成果発表会「ビジュアル資料と渋沢敬三—アチックフィルム・写真からの展望—」、2014（平成 26）年 2 月 22 日（土）、神奈川大学横浜キャンパス 24 号館 105 講堂。

参考文献

- 1961 野村孝文『南西諸島の民家』相模書房
- 1982 桜田勝徳『桜田勝徳著作集 第 7 卷』名著出版
- 1995 十島村誌編集委員会編『十島村誌』十島村
- 2011 神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学 国際常民文化研究機構編『神奈川大学日本常民文化研究所 アチック写真 vol. 2』神奈川大学日本常民文化研究所・神奈川大学 国際常民文化研究機構
- 2013 国立民族学博物館監修『渋沢敬三没後 50 年 屋根裏部屋の博物館 ATTIC MUSEUM』淡交社